

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 4 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520280

研究課題名(和文)小説から映画へ「アダプテーションの詩学」構築に向けて

研究課題名(英文)Novel to Film--Towards a Poetics of Adaptation

研究代表者

佐々木 徹(Sasaki, Toru)

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：30170682

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究のテーマは小説から映画へのアダプテーション、ならびにそれに関連する意味におけるディケンズの作品研究であった。その主たる研究成果は2012年のイギリスでの国際学会講演、2013年の共編著(日本で出版された、ディケンズに関する英文論文集)、2014年における国内学会でのアダプテーションについての講演、ならびにイギリスでのディケンズに関する招待講演である。2012年の国際講演ならびに2014年の国内講演を英語論文にしたものは第一級の国際学術誌であるEssays in CriticismとStyleにそれぞれ掲載されることが決まっている。

研究成果の概要(英文)：The aim of this research project was a comprehensive study of novel-to-film adaptation and a close examination of the works of Dickens in the aspects that are related to adaptation. The main fruit of this research was: in 2012, a guest lecture at an international conference on Dickens in England; in 2013, a co-edited book on Dickens (in English; published in Japan); in 2014 a guest lecture on Dickens in England, and a guest lecture in Japan on the adaptation of a Bierce story into a film. The 2012 lecture on Dickens and 2014 lecture on Bierce are to appear in Essays in Criticism (Oxford UP) and Style (Penn State UP) respectively.

研究分野：人文学

キーワード：アダプテーション 英文学 ディケンズ 映画

1. 研究開始当初の背景

本研究は、広い意味で、研究代表者がこれまで継続して行っているチャールズ・ディケンズを中心とするイギリス小説に関する研究の延長線上に位置づけられる。より具体的には、平成21年度から23年度にかけて科学研究費補助金を得て行った「ディケンズとアダプテーションに関する考察」の対象をディケンズという作家から広く小説一般に拡大し、小説から映画へのアダプテーションに関する包括的詩学の構築を試みるものである。

2. 研究の目的

ディケンズは最も映画的な小説家とよく言われる。ソヴィエトの映画監督エイゼンシュテインは、その画期的な評論「ディケンズ、グリフィス、そして私たち」(1944)の中で、サイレント映画の巨匠グリフィスの最も偉大な功績をモンタージュ技法の開拓に認め、それを触発したのはディケンズだと指摘した。『オリヴァー・トウィスト』に於ける、平行する物語を交互に展開させるモンタージュ進行や、細かいカット割りによるモンタージュ的提示に見られるように、ディケンズの叙述方法は映画的表現を先取りしていることを彼は明らかにした。

映画と小説の技巧面における類似に着目するこの種の考察の代表例として、デイヴィッド・ロッジの「映画的小説家としてのハーディ」(1977)がある。彼によれば映画的な小説家とは、目に見えない抽象的な概念等も扱い得る小説固有の特権的表現をあえて行使せず、素材を外から視覚的にとらえて提示する者を指す。ハーディの特質はストーリーや心理描写にあるのではなく、あたかも映画監督のように、人物の行動のある具体的な環境の中において想像し、両者の関係を多種多様なカメラワークに相当する言語表現を駆使して描出する点に存することになる。

このように、エイゼンシュテインやロッジは映画的な文学表現を云々するが、では具体的に映画的表現を構成する言語的要件とは何なのかと問うならば、実はいまだ一向に明らかになっていない。われわれは先ずこの根本的な問いに答えなければならないであろう。

ディケンズはもちろん、ハーディも映画以前の作家であり、彼らの小説技法は光学技術の発展に先んじていたことになる。ただし、ディケンズより一世代後のハーディは自身実際に映画と関わりを持った。映画会社とのやり取りや、自作をもとにした映画についての感想は彼の書簡に保存されており、これらは小説家が映画の世界に接した最初期の記録として極めて興味深い資料となっている。例えば、彼は「映画は文学とは何の関係もないのであり、唯一考慮すべきは経済的な観点と、本の存在をより多くの人に知らしめる効果だけだ」(1923年5月17日)と手紙の中で

述べている。今日ベストセラーになった小説はほぼ間違いなく映画になるし、いわゆる名作とされる古典的な小説は繰返し映画化される。そして、映画化されればその小説の売れ行きは確実に伸びるから、「経済的な観点」からのハーディの読みは正しかったと言える。だが、「映画と文学とは何の関係もない」という観察については疑問符がつくだろう。小説作品の映画化が頻繁に行われてきたこの100年余りを振り返ると、優れた映像作家はさまざまな工夫を凝らして原作の感触を伝えようとしてきた、あるいは独自の創意により原作にさらに豊かな意味をつけ加えようとしてきたという事実がある。偉大な映画批評家アンドレ・バザンが夙に指摘したように、映画と小説の間には芸術的な想像力の働く余地が存在するはずだ。

では現実に、アダプテーションの結果生じた作品をどう評価するか、となるとこれが難しい。ヴィンセント・ミネリ監督の『肉体の遺産』(1959)という映画を例にとろう。この映画を見て面白いと思った読者が、ハーディに影響を受けたとされるアメリカ南部の作家ウィリアム・ハンフリーの原作 *Home from the Hill* (1957) を読んでみると、驚いたことに、最後に希望の灯となる人物はもとの小説には存在していないとわかる。ハンフリーの描いた世界は確かにハーディを思わせる極めて悲劇的なもので、ハッピー・エンディングはハリウッド的改ざんであった。このような経験をした時、われわれは映画の評価を下げるべきなのであるか？あるいは、そもそも、小説に基づく映画は必ず原作と比較されねばならないのか？ ヒッチコックの『サイコ』を研究するにあたって、ロバート・ブロックの原作はまず参照されない。原作との関係が問題になるのは「文学」と認定されている作品が対象になっている場合に限られているようだ。それならハンフリーのように、「文学」畑の作家ではあっても、決して有名ではない場合はどうなるのだろうか？ たまたま原作を知っていれば比較するし、そうでなければ映画だけで判断する、ということなのか？

「小説は小説、映画は映画」と完全に割り切ってしまうと、筋道ははっきりするかもしれない。論じるに値しないと判断される作品が原作の場合も含め、いちいち原作を読まずとも映画を独立した芸術作品として批評すればよいのだから。確かにこれで済めば話は簡単だ。しかし、ディケンズやハーディの映画化ならば、原作との比較なしに鑑賞するのは困難であるし、映画は「ハーディ小説の完全映画化」などと宣伝されるのが普通である。それなら、映画を独立した作品として批評するのの一つの方法だし、原作と比較するのの一つの方法だと両方肯定するのか？原作と比較すると、『肉体の遺産』は著しく「忠実性」を欠いていると言える。一般に、この言葉は映画化に際しての物語内容の改

変に関してよく用いられるが、近年この概念は、「映画をあくまでも小説に隷属させる価値観の反映にすぎない」など、アダプテーションというプロセスの厳密な理解を妨げる邪魔者として扱われている。しかし、ミネリの画面構成の妙を認め、映画には映画としての価値を見定めた上で、もしも「作品の精神」なるものがある程度厳密に定義できるのなら、「映画『肉体の遺産』は人間の運命の悲劇性を核に持つハンフリーの小説の精神を裏切った」と言うことは無意味ではなからう。とは言え、例えば、「忠実性」の重要性を訴えるバザンが映画『田舎司祭の日記』を論じて、「ベルナノスの誇張法の等価物はブレッソンの編集における省略や緩叙法である」と言う時（彼は等価な表現の成就こそアダプテーションの成功の指標であるとした）、何をもちてそれが「等価」と認定されるのか判然としないのである。

このように、映画と小説の間には解決されていない問題点がまだ沢山残っている。本研究は、上に記したような諸問題を整理しつつ、3年間でできるかぎり解答に近づこうとするものである。

3. 研究の方法

(平成24年度)

ディケンズの作品『オリヴァー・トウィスト』の第18章で、主人公がフェイギンのアジトの屋根裏から隣の家の屋根を眺める時、彼の眼に映るものの一つに「黒くなった(blackened)煙突」がある。そして、そのわずか数頁の後、我々はフェイギンがオリヴァーを悪の道に誘い込み、「彼の魂を黒く塗ろう(blacken)」と企んでいると知らされる。ここにはディケンズの靴墨工場(blacking factory)の記憶が潜んでいるに違いない。その『オリヴァー』の次に書かれた『ニコラス・ニクルビー』第40章に、本筋とは何の関係もない無名の少年が一場面のみ登場する。彼は足が悪く外に出られないので、屋根裏にある自分の部屋から「暗い家々の屋根」をじっと眺めて時を過ごしている。唯一の楽しみは窓の外に置いた花の世話であり、その花は「靴墨の瓶」に活けられている。<屋根裏><屋根><靴墨>のモチーフから、この少年はオリヴァーを書き換えた(アダプトした)ものだと思われ間違いあるまい。そして彼は松葉杖をつき『クリスマス・キャロル』のタイニー・ティムへと発展する。また、彼が hump-backed と表現されていることに着目するならば、この子は一方ではグロテスクな『骨董屋』のクウィルプ、もう一方では哀れを誘う『共通の友だち』のジェニー・レンといった重要な人物へと変形すると考えるのも可能であろう。

エドモンド・ウィルソンが明らかにしたように、靴墨工場での経験はディケンズにとって決定的な意味を持った。結果として彼はその記憶にまつわる物語を執拗にアダプトし続ける。つまり、ディケンズの作品の主要な

部分は、彼の想像力の核心に位置する自伝テキスト(彼は1840年代のある時期にその一部を比較的ストレートに書き遺した——それは今日「自伝的断片」として知られている)のアダプテーションなのである。アダプテーションをこのような角度から考えると、ディケンズの自伝的想像力が彼の作品中にいつ、どのように働いたか、系統立てて理解することが可能となるだろう。

このような「アダプター」としてのディケンズ研究の総括として、8月に連合王国ポーツマスで行われる国際ディケンズ・フェロウシップ大会で講演を行い、その成果を問う。これはディケンズ生誕200年を記念して彼の生誕の地で行われる大規模な国際学会であり、研究代表者は最近の研究成果(国際誌 *The Dickensian* の投稿論文ならびにCUP出版の共著書 *Charles Dickens in Context*)を評価されて、招待講演を行う運びとなった。また、生誕200年記念事業の一環として行われる英国フィルムセンターのディケンズ映画回顧展に出席し、調査を行う。これらの作業と並行して映像資料・小説資料の収集に従事し、小説と映画の表現法の比較研究の基礎作りを行う。(平成25年度)

リンダ・ハッチョンが指摘するとおり、アダプテーションを論じるにあたって、原作に対する忠実性にいたずらにこだわるのは生産的でない。デイヴィッド・リーン監督による『大いなる遺産』(1946)では、エステルとドラムルを結婚させるつもりだと聞かされたピップは失望してミス・ハヴィシャムの部屋を去る。彼は後ろ手に強い勢いでドアを閉める。ドアの閉まる大きい音。そこでカットして次のショットでは、暖炉から火のついた石炭が転がり、ミス・ハヴィシャムのドレスに火がつく。このようにして彼女がひどい火傷を負うとは原作には書いていないのだが、リーンのフィルム編集は、自分の一生を完全に狂わせた彼女に対する主人公の無意識の怒り(原作においても十分にあり得る感情である)を巧みに表現している。

この場面は小説と映画のアダプテーション・テキストの「隣接性」を的確に示している。「隣接性」とは、すなわち、原作に隷属する「忠実性」とは質を異にするもので、原作テキストに隣接してその意味世界をより豊かにする関係性である。この「隣接性」を示し得る映画テキストを探求し、それを系統的に考察することが25年度の重要な仕事となる。

(平成26年度)

研究代表者は2004年、ロンドンで行われた“A Man for All Media”と題された学会でディケンズと映画についてのパネル・セッションの司会を務めた。その時のセッションを共にしたのがスターリング大学名誉教授グレアム・スミスとインディアナ大学教授ジョス・マーシュであった。この二人とはそれ以後も緊密な連絡を取り合っており、そのコン

タクトを生かして、イギリスとアメリカ両国において、映画と小説のアダプテーションに関する文献収集、情報収集を行い、かつ研究の進捗状況についてレビューを受ける。その後、国際学会において、忠実性、隣接性、広い意味でのアダプテーションを包括した詩学の構築に向けた三年間の成果を問う発表を行う。

4. 研究成果

アンブローズ・ピアス原作の「アウル・クリーク橋の出来事」をアダプトしたロベール・アンリコ監督の映画について、講演を行い、その草稿を英語にして、有力な国際誌 *Style* に投稿し、掲載が決まった。

ディケンズとアダプテーションについて、彼が自身の少年期の靴墨工場体験を作品の中にアダプトした経緯を作品言語から抽出した論文がイギリスで最も権威ある雑誌 *Essays in Criticism* に採用された。

備品費で購入した映像資料を活用し、文学作品の映画へのアダプテーションの広範な実例に接することができた。文献調査の点では、Colin MacCabe 著 *True to the Spirit*、Simone Murray 著 *The Adaptation Industry* などの研究書には特に啓発されるところが多く、今後の研究方針に関して貴重な示唆を得た。

旅費を利用した外国出張においては、ロンドンの英国フィルムセンターにおもむき、映像関係資料の調査を行うとともに、連合王国ポーツマスにて開催された国際学会で（「アダプターとしてのディケンズ」という観点につながる）講演を行った。また、ディケンズの『大いなる遺産』に関する講演をロンドンで行った。聴衆の中にいた研究者の幾人かから貴重なコメントを得ることができたし、新たな研究上のコンタクトも確立することができた。

謝金を用いて、来日中のカリフォルニア大学ロサンゼルス校キャサリン・ギャラガー教授と長時間面談し、ディケンズに関する教授の著書について詳細な説明を聴き、アダプテーション研究に関して貴重な助言を得ることができた。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 6 件)

佐々木徹、Back to the Owl Creek Bridge、査読有、第 49 号、2015 年、印刷予定

佐々木徹、“Crooked Chimneys and Rheumatic Sparrows: the Impact of the Blacking Factory on Dickens” *Essays in Criticism* 査読有、Vol. 55、2015、印刷予定

〔学会発表〕(計 9 件)

佐々木徹、“The Impact of the Blacking Factory”、国際ディケンズ・フェロウシップ、

ポーツマス大会招待講演、2012 年

佐々木徹、“Knowing and Not Knowing in *Great Expectations*”、国際ディケンズ・フェロウシップ、ロンドン本部招待講演、2014 年

〔図書〕(計 1 件)

佐々木徹 他、大阪教育図書、*Dickens in Japan: Bicentenary Essays*、2013 年、229

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐々木 徹 (SASAKI TORU)

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：30170682